えんぴつリレー

No. 137

『メダカと私』

市町区　中澤　邦子

平成8年5月末、職場の仲間から、何気なくメダカを頂きました。気が付いたら、今年で20年も飼っていました。姿・形の変わらないものとの暮らしは、時の経過を感じさせない何かがあり、朝は「元気?」夕方は「居るね。」と会話して餌やりをします。今年の春は、産卵が遅いと思っていたら、近所に住むカエルが卵を「ご馳走さま」していました。自然の連鎖ですが、ここは追い払い、世代交代分は無事生育できました。

今までにたくさん生育した年は、知人に分けたり、千曲川に委ね、「友達をたくさん作ってね。」と別れてきました。

古い話ですが、メダカと私の縁話を聞いてください。

私が北大井小学校へ入学したのは、昭和24年。戦後の本当に疲弊した時代で、家の中の文明らしき物は、裸電球とラジオだけでした。私は今でいう「見聞や行楽」という言葉さえ知りませんでした。

記憶は定かではないけれど3年生の時だったと思います。学校の施設作り資材として、小石が必要になり千曲川へ皆で石拾いに行きました。

初めて見た千曲川は、沢山の水がすごい音で流れ、大小の丸い石は山奥で育った私には、今でも忘れられない景色で感動的でした。

そして浅瀬に足を入れるとあっちにもこっちにも無数の小魚が、輪になり直になり、散ったり集まったりして泳いでいました。

メダカとの初対面でした。私は、今までに数匹のドジョウと池の鯉しか見たことがなく思わず両手ですくうが逃げられ、スカートを広げて捕ろうとしたけれど、捕れません。

今日は捕るのを諦めていつか父と捕りに来ようと決めました。「そうだ、鍋いっぱいになるほど捕って、母に佃煮を作ってもらおう。」良い考えだと思いました。

川で拾った石は、学校へ持ち帰りましたが、風呂敷に包んだ石は非常に重く、苦渋の長い道中でした。

その後、澄んだ川の水と銀の鱗を光らせ泳ぐ魚は、忘れがたく、父に何度か「川に連れてって!!」とせがみましたが、いつも返事は曖昧で、「そのうちになぁ～」でした。その時から60年余年が過ぎ、今ではメダカの佃煮ができるほど生育しますが、なぜか佃煮を作ったことはありません。

また、昨今の異常な気象では、川に託すこともためらわれ、「自然は最初に弱いものから苦難を与えるのかな?」と思っています。私にとってメダカが家の庭で、「平静に居る」。このことが一番うれしく安心の糧なのです。家族に支えられ育ててきて、時折来る孫との清掃作業も本当にうれしい時間です。

川柳

柳好会

- 我が儘も 母の傘ある 内と知る　高山　はな
- 平凡に 生きて疑問の 残る今　山のあなた
- 傷心を 故郷の風が そっと撫で　泉　多愉
- 身の丈を 悟る暮らしに ある安堵　街角の一枝
- 余生でも 夏は自給の 土に這う　土屋　正示
- 夏空に 子育てつばめ 休まない　井出　秀夫

短歌

小諸短歌会

- 指折りて 曽孫のくる日 待ちて居り　わが唯一の 生甲斐なれば　高橋　成子
- 青空に 白き夏雲 湧き立ちて　蝉声しげし 午後の無人駅　篠原　昭枝
- 夏場所にて 木曽生まれの 御嶽海　敢闘賞受け テレビに笑まふ　小山　力
- 庭の松 朽りて未知なる 広がりに　はるかに望む 信号の赤　山口　ゑみ子
- 梅雨明けを 報せるごとく 蜩の鳴く　暑き日の たそがれ時に　佐藤　初子
- 美術館 巡りて知るは 作者等の　鋭い眼と 心の思い　畑　忠房